



日本第四紀学会講演要旨集
PROGRAMME and ABSTRACTS

53

日本第四紀学会 2023 年大会
早稲田大学所沢キャンパス

プレ巡検

8月31日

一般研究発表

9月1日・2日

シンポジウム「都市環境～ウェルビーイングな社会創出のための第四紀研究」

普及講演会・アウトリーチ巡検

9月3日

専門巡検

9月4日

日本第四紀学会

Japan Association for Quaternary Research

カンボジア中部サンボー・プレイ・クック遺跡群の古環境復元調査

下田一太（筑波大学）・山田和芳・久保純子（早稲田大学）・本村充保（檀原考古学研究所）・南雲直子（国立研究開発法人土木研究所）・藤木利之（岡山理科大学）・森勇一（東海シニア自然大学）・山口博之（東北芸術工科大学）・中西利典（ふじのくに地球環境史ミュージアム）

Ichita SHIMODA, Kazuyoshi YAMADA, Sumiko KUBO, Mitsuyasu MOTOMURA, Naoko NAGUMO, Toshiyuki FUJIKI, Yuichi MORI, Hiroyuki YAMAGUCHI, Toshimichi NAKANISHI: Paleoenvironmental Study of Sambor Prei Kuk Archaeological Site in Cambodia

1. はじめに

サンボー・プレイ・クックはカンボジアの中部コンポン・トム州に位置する遺跡群である。前アンコール時代の王都イーシャーナプラに比定され、7世紀初頭には煉瓦造のヒンドゥー教寺院が多数建立され、最盛期を迎えたと考えられる。寺院が集中する地区の西側には一辺約2kmのほぼ方形平面の都城が築かれ、東辺を除く三方には水路が巡らされた。この都城内には103基の煉瓦遺構の他、多数の溜池が認められる。

2023年3月にこの遺跡群の古環境復元を目的として、環濠、溜池、水田、水路の痕跡地において発掘調査を実施した。各発掘調査では堆積土の層序を確認し、試料を採取した。現在は、土壌の粒度分布、化学組成の分析、土中の花粉、植物遺体、昆虫遺体の分析、炭化物の年代測定を進めている。本稿では主に環濠において実施した発掘調査結果の概要を記す。

2. 都城の環濠

都城の北・西・南辺には約2kmの長さで、方位角よりやや反時計回りに偏向した方形の地区を形成する水路が築かれている。水路の内外には土手が築かれている。内外の土手は周囲との比高1m、幅は30~40mである。現在、雨季に水路内は1m程の水深になるが、乾季には一部を除いては干上がり、また水路を横断する盛土が幾筋も認められるため、水路は連続することはない。当地は北東から南西へと緩やかな傾斜地となり、環濠の北東隅には北方より南流する水路の痕跡が接続していることから、往時には北東隅より水が流れ込み、これが各辺の水路を満たして一つながりの環濠とされていた可能性も推測される。また、都城の東辺は南流する自然河川の開析谷で縁取られている。なお、西辺の水路中点からは南西へと長大な線状の土手遺構が発見しており、約170km延伸してアンコール遺跡群の南方に至る。

3. 環濠の発掘調査地点

調査地A：西辺の中央やや南側、調査地B：西辺の北端付近、調査地C：北辺の西端付近の3か所で発掘調査を実施した。調査地Aは、水路と外側の土手の内側半分を横断するトレンチ調査であり、1m幅で40m長さに対してトレンチを設けた。調査地BとCはそれぞれ1×2mのトレンチ調査を水路幅の中心付近で行った。なお、2012年に

久保と南雲は調査地BとCの付近でそれぞれ発掘調査を行っている(Kubo et al. 2016)。

4. 環濠の盛土・堆積土の層序解釈

調査地Aにおける環濠の盛土部分は3層に分層された。上から、灰色の細砂による「表土層」、にぶい橙色の細砂による「盛土層」、にぶい黄褐色の細砂からシルト質の固く締まった土による「地山層」である。盛土層はトレンチ西端の土手のほぼ中央地点で最も厚く約1.5m厚であった。盛土層の上面は侵食されて土手の内外に流れているようであるから、当初の土手高さよりもやや低くなっていることが推測される。また、盛土層はさらに5層程度に分層することができるが、築造時期の違いを意味しているのかどうかは定かではない。盛土内から採取した複数の炭化物の年代測定の結果に基づき、さらなる検討を要する。

環濠内の堆積土は5層に分層された。上から、黒色の細砂による「表土層」、表土層と連続的でやや明るい色の細砂である「堆積土層」、内外の土手が崩れて流れ込んだ「盛土流入層」、環濠としての機能を維持していた時期に堆積したものと考えられる粘土質の薄層や白色の砂質層を含む「濠底堆積土層」、そして「地山層」である。地山上の堆積土層は全体で50~70cm程の厚さであった。中でも環濠としての利用期間や状態を推測する手がかりとなる「濠底堆積土層」は20~30cm程度でかなり薄い。環濠としての稼働期間中に濠底が浚渫されたことも推測されるが、少なくとも今回の発掘調査の範囲では浚渫した土を土手に盛った痕跡は認められなかった。また、「濠底堆積土層」が確認された範囲から、当初の環濠幅は20.6m程と推測された。

調査地BとCは調査地Aの環濠内の層序と共通しているものと解釈できるが、地山が白色の細砂である点が異なる。

今後は各層より採取した炭化物の年代測定や土砂の分析結果に基づき、層序の再解釈を行い、7世紀に掘削されたと推測されるこの環濠の管理状況や放棄の時期について考察を行う予定である。

引用文献：Kubo et al. (2016) Radiocarbon Ages and Stratigraphy in the City Area of the Sambor Prei Kuk Pre-Angkor Archaeological Site, Cambodia, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要. 26, 43-55.

2023年8月31日発行

発行 日本第四紀学会

〒169-0072 新宿区大久保2丁目4番地12号
新宿ラムダックスビル 日本第四紀学会事務局

E-mail:daiyonki@shunkosha.com

©日本第四紀学会 2023

©Japan Association for Quaternary Research 2023

(無断転載を禁じます)